

Title	後期授業概要
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 15 P.19-P.19
Issue Date	2006-03-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/8709
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

後期授業概要

1	2	3	4	5
<p>10月29日</p> <p>玉地 雅浩 (コーディネーター 濱田 唯)</p> <p>身体①「我々は物にどのような出会っているか?」</p>	<p>11月5日</p> <p>西川 勝 榎本 直樹 (コーディネーター)</p> <p>身体②「老いる」を哲学する</p>	<p>11月19日</p> <p>武田 朋士 (コーディネーター 濱田 唯)</p> <p>笑い①「おもしろさを人に伝えることができるか」</p>	<p>11月26日</p> <p>武田 朋士 (コーディネーター 濱田 唯)</p> <p>笑い②「何がおもしろさをつくるのか」</p>	<p>12月3日</p> <p>紀平 知樹 榎本 直樹 武田 朋士 濱田 唯</p> <p>「全体がふり返り」</p>
<p>講師の玉地さんは身体の動きについて授業をしました。壁を前にして椅子から立ちあがったり、机の上ののって左右に揺られてみたり、片目でハンドビデオをのぞきながら廊下を壁沿いに歩いたり、普段生活している教室を舞台に、ちよっと違う状況の中で動いてみる、そのときの身体感覚や動きの特徴について考えるというものでした。生徒はぎこちなく体をうごかしてみながら、その時々で気がついたことを言葉にしていきましました。玉地さんは、日ごろのリハビリ患者の動きを説明し、状況によって身体の動きがどのように変わっていくか説明を交えながらも、生徒の意見を受け止めようと忙しいうちに耳を傾ける、不思議な授業風景だったと思います。</p>	<p>高西さん自身身の認知の人にかかわる介護の経験を紹介してもらった後、「老いる」からイメージすることについて話し合った。「老いのマイナス面（「成長しなくなる」「限界を感じる」「できなくなる」）やプラス面（「経験の積み重ね」「納得していくこと」）等多くの発言が得られていくことと、その後「成長」「成熟」を出され、その後に「老いの意味」についてみながら考えた。こちら側から「ここからか老いで近なものではないか、と投げかけてみて、16歳の若者にとって「老い」実感はまったくなさそうだった。</p>	<p>「笑い」の哲学的分析を、対話という形で行うことを2回こたわって行った。その1回目。</p> <p>この2回の授業で、感研研なものとして片付けてしまわぬ「笑い」というテーマを通じて、他人に伝わる言葉で話し、他人の言葉理解しようとする態度を身につけるというを目的として設定していた。そこで、最終に、漫才を見るとき具体的な体験と、それを抽象的に言葉起こすという体験との両方をこの授業列に言うことで、その目的の達成を際立つて説明した。</p> <p>その後、実際にご自分の漫才のビデオを見て、少人数のグループに分かれてそれぞれご自分のおもしろかったか、なぜそれがおもしろいとおもったかを話してもらった。最後に、各グループで出した意見を簡単に発表してもらって、初回を終えた。</p>	<p>「笑い」をテーマにした授業の2回目。前回最後に出してもらった、漫才のおもしろかったところとその理由、及び哲学者（アリストテレス、ベルクソン、ショーペンハウアーなど）の「笑い」に関する理論とをまとめたいプリントを配布し、それを基に、「おもしろさ」をつくっていたのは何かについて皆で話しあった。哲学者の理論を参考にしながらも、前回の体験で自分が感じたことから、前回は体論に足らぬ着いた議論に、地に着いた議論にならなかった。逆に、前回欠席していた生徒が、話に乗りにくそうだった。哲学者の理論を媒介にするということと及び対話という形式をとることによって、他人の考えを受け取り、自分の考えを発信する地帯を、少なからず形成することができた。</p>	<p>前期の最後にとったアンケート、後期の授業の感想で、授業内の対話かみあっていない、脱線が多い、テーマについて十分に深められていないという意見が多く出されたことを受けて、1年間の授業を振り返ってもらった。それから「対話」について考えてもらった。授業の感想、不満をだしてもらい、そこから、対話の目的は何なのか、ということか、対話の方法など、対話を成立させるためにどのような条件を整えることが必要かなどを問ういく方向にすんだ。それらについて深く考えたが、「対話」について考えたうえで、多くの重要な論点が生まれ、これまでの授業以上に生徒間での意見の衝突があり、活発な意見がだされた。</p>